

中野達司先生をお送りするの辞

大塚 直樹

中野達司先生は、1952年伊豆に生まれた。1985年、東京外国語大学大学院地域研究研究科修士課程を修了し、1988年、国際関係学部が新設される2年前、亜細亜大学に着任された。1990年4月、国際関係学部国際関係学科が設置されるとすぐに同所属となり、以後、31年間の長きにわたり、国際関係学部の礎を築くだけでなく、その発展に寄与されてきた。また2012年4月、国際関係学部が多文化コミュニケーション学科との2学科体制となったことを契機にして、同学科に異動された。以後、多文化コミュニケーション学科の特長である地域言語（スペイン語）および体験型授業の一翼を担われてきた。

中野先生のご専門は、地域研究であり、メキシコを中心にして、米墨国境問題、チカノについて研究されてきた。本学部でもその専門性を遺憾なく発揮され、専門科目「中南米の社会と文化」を長らく担当されてきた。このことから詳らかなように、中野先生が担当されたスペイン語とは、中南米に文化的なルーツをもったことばとしてのスペイン語である。

語学教育は、共通のツールとして言語そのものを教える場合と、当該地域の社会・文化的な背景を含めた、広くその社会を理解するためのローカルなツールとして教授する場合との両面性を有する。多文化コミュニケーション学科の地域言語は後者を重視し、1年次必修科目とするだけでなく、2年次以降も、選択科目として中級・上級と学び続けられるカリキュラムを組ん

でいる。学科ではまた、2年次春学期の亜細亜大学アメリカ留学プログラム(AUAP)への参加を推奨している。具体的な留学先によってその重要度が異なるものの、中南米との関係を抜きにして北米を捉えようとする、その理解に偏りが生じてしまう。とくに後に述べる、アメリカとメキシコとの領域をめぐるせめぎ合いの歴史は等閑視できない問題である。こうした点を接合する意味においても、中野先生は地域言語をご担当する適任者であった。

中野先生はまた、理系分野にも造詣が深く、環境問題に大きな関心を寄せられてきた。多文化コミュニケーション学科2年次秋学期開講の「プレ専門ゼミ」(必修科目)で先生は、「自然、環境について考える」というテーマを掲げ、自然と親しむ志をもつ学生を集めてきた。先生のテーマは、多文化コミュニケーション学科の多文化性にさらなる彩りを添えてきた。また自然環境に対する先生自身の問題意識と学生教育とを結びつけた科目が「体験で学ぶ地球環境論」である。本科目は、名称に示されているように体験型授業であり、野口健特別招聘教授とともに富士山清掃をおこない、さらには身近な外来生物・植物の観察をも盛り込んだ、学生にとって魅力(と人気)があるものとなっている。

先に述べたごとく、中野先生は中南米を地域研究の視座から俯瞰されてきた。そのなかでも米墨国境問題についての単著『メキシコの悲哀——大国の横暴の翳に』(2010年、松籟社)を上梓なさっている。同書では、米墨両国が国境を接するようになってから200年間に起こった出来事が論じられている。序で述べられているとおり、先生は米墨の境界線をめぐる歴史をメキシコ側の視点から描いている。

全6章構成の同書では、まず米墨戦争にいたる過程と、結果としてメキシコが領土の半分以上を喪失してゆく状況が描写されている。続いて、節のタイトルともなっている「メキシコ野郎を吊しちまえ」に象徴される、アメリカの占領過程にみられるメキシコ人に対する差別的な処遇、さらにはフィリプスターやフランスによる旧メキシコ領への侵入・侵略が詳述されている。最後にメキシコ人に対する歴史的な差別待遇がアメリカへの低賃金の労働

力移入という形で変奏され、いわば合法化したことと、それに付随するインフォーマルなメキシコ人の移動問題および顛末にフォーカスが当てられている。同書の帯にみられるように「哀れなるかなメキシコ、天国から斯くも遠く、米国に斯くも近し……」が中野先生の旗幟を如実に示しているといえよう。

全学に目を転ずると、中野先生はまた、入試委員長として長らく、本学を下支えされてきた。とくに入試委員長として通常の多忙な入試業務をこなすかたわら、センター試験利用入試（現、大学入学共通テスト利用入試）で部分的に導入されていた、3科目型入試の実施を提案され、その実現に向けてお骨折りされてきた。それが結実し、2021年度入試から学科別入試で3科目型入試が導入された。2科目型から3科目型入試に変更すると、一時的な志願者数の減少につながるものが懸念され、改革の声をあげにくいところ、中野先生はあえてそれを提唱された。長期的な少子化傾向に鑑みると、今後の18歳人口減を避けられない状況にある。競合する他大学と足並みを揃える上、ないしそれとの差別化をはかるためにも、この時点で3科目型入試を導入できたことは本学にとって慶福であり、「あの時に3科目型入試を導入しておいてよかった」と回顧する日がくると、個人的には考えている。

最後に私的なことを書かせていただくことをお許し願いたい。入試委員時代を含め、本学着任以降、中野先生の茶房（研究室）によくお邪魔し、さまざまな事柄についてご相談に乗っていただいた。研究室に伺うと、中野先生は必ずおいしいお茶（おもに緑茶、ときに豆茶）をいれてくださった。当然のごとくまた労をいとわず、緑茶は湯冷ました上で茶托に載せて出していただいた。さらにそれに合わせるように和菓子を添えていただき、それがまた美味であった（途中から、こちらが主目的となった感も否めない）。この4月から茶房が休業してしまうことは寂しい限りであるが、また何かの機会に再開していただくことを切に望んで、おくる言葉を閉じたい。